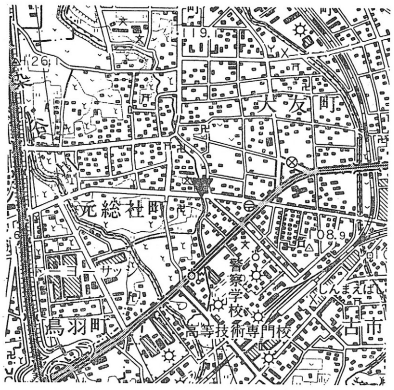
群馬・元総社寺田遺跡（もとそうじゃてらだ）

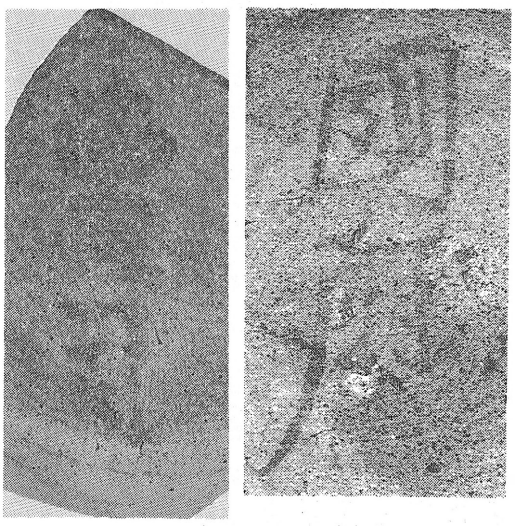
1 所在地　群馬県前橋市元総社町
2 調査期間　第七次調査　一九九三年（平5）四月～一〇月
3 発掘機関　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
4 調査担当者　藤巻幸男・桜井美枝・矢口裕之
5 遺跡の種類　集落跡・旧河道（国府推定地）
6 遺跡の年代　縄文時代中期～近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

元総社寺田遺跡は、前橋市街地の西方約一km、南流する牛池川沿いに位置している。榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地の先端部に立地し、周辺には低平な台地と中・小河川に伴う低地が広がっている。本遺跡の北西には上野総社神社が隣接し、また北西約一・五kmには上野国分僧寺・尼寺跡が位置するなどしており付近一帯は古くから上野国府跡と想定されてきた。しかし、これまでの発掘調査では、それを示すような遺構・遺物は発見されていなかった。



（前　橋）

本遺跡の調査は、牛池川の河川改修工事に伴い、一九八八年より着手され、今回の第七次調査では、総社神社南東の台地と低地を対象とした。奈良・平安時代の遺構は、台地上で竪穴住居一五棟、低地部で牛池川旧河道が検出された。墨書のある木製品や墨書土器は、いずれも旧河道から出土した。旧河道は六世紀初頭に降下した榛名山二ツ岳火山灰を切り込んでおり、上面は天仁元年（一一〇八）降下の浅間山火山灰で覆われている。旧河道中からは八・九世紀を主体


墨書土器（部分）
「□曹司」　「国厨」

とする多量の土器類を中心に、瓦・硯・羽口・木器などが出土した。土器類は須恵器が主体で、漆を貯蔵した壺甕類、全面に漆が塗られた杯、底部にそれぞれ「国厨」「厨」「□曹司」と記された杯がある。この他、人形五点・琴柱形・刀子形・馬形などの木製祭祀具も出土している。人形は同じ旧河道内からまとまって出土しており、同時に使用された可能性が高い。「国厨」「□曹司」の墨書土器は八世紀末～九世紀初頭のもので、人形はそれよりやや新しい時期であろう。「国厨」「□曹司」の墨書土器や人形などの木製祭祀具をはじめとする本遺跡出土遺物の内容から、今回はじめてこの付近一帯に上野国府の存在が想定できるような物的証拠が得られたわけである。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「檜女」　133×17×3　061

(2)　「檜女」　137×17×2　061

(3)　「十四泉」　径163×厚さ11　061

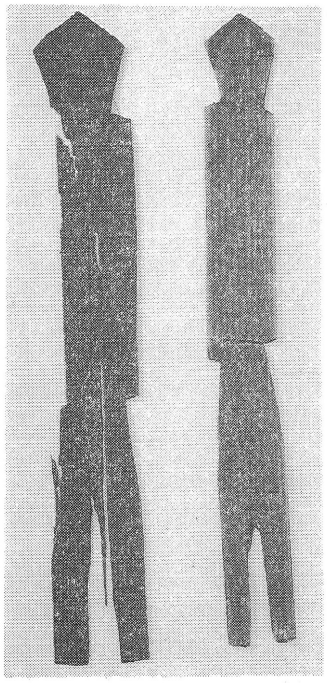
(1)(2)は人形の表面、胸のあたりに記されている。二点とも顔の表現は明瞭である。この人形を用いて祓を行なった人物の名とみてよいだろう。平城宮跡出土の釘が打たれた呪詛の人形に、呪詛対象とみられる人名が記されたものが著名であるが、祓に用いられた人形で、その主体とみられる人名を記したものは、現時点ではあまり類例を聞かない。他に人形が三点あるが、墨痕は確認できなかった。(3)は曲物の底板である。

本遺跡の出土遺物は、現在、整理作業が進められており、詳細については今後刊行される報告書の中で明らかにしていきたい。

9　関係文献

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』一三（一九九四年）

（1～7・9　藤巻幸男
8　高島英之）



(2)　(1)